

第 50 回全国衛生化学技術協議会年会 富山で開催 Rev2.5

企画調整主幹付 宮原 誠

11 月 7～8 日富山県富山市で全国衛生化学技術協議会年会が開催された。研究発表に先立ち行われた総会で本協議会会長の川西徹国立衛研所長は”全化協加盟機関が担っている公衆衛生の確保には、地方と国との連携が大切”と地衛研の人々と本会を通じてその絆を深めたいと挨拶した。



全化協総会で挨拶する川西所長

オックスカナルパークホテル富山にて 2013 年撮影

今年の年会は 2015 年春の開通を目指している北陸新幹線富山駅の建設現場とは反対側の富岩環水公園近くのオックスカナルパークホテルで開催された。にわか雨が降ったり止んだりする天気の中、全国の衛生試験研究機関の 310 人が集まった。食品、環境・家庭用品、薬事の各部門の演題数はそれぞれ 73、39、17 で、合計 129 であった。

研究発表の前に総会が開かれ、本年会を主催した富山県衛生研究所長の佐多徹太郎所長はその開催の辞で、“衛研同士、お互いに顔の見える関係でありたい”と国・地方衛研の連携強化を呼びかけた。

川西所長も挨拶の中で、“国民生活の安全性の確保には、地方と国の公的試験研究機関の連携が重要である。近年、この役割

についての一般的な理解が必ずしも十分でなく、人員や予算で困っている機関が少なくないと認識している。その点を含めて年会で成果の発表、情報交換、今後の方策等について議論する機会としたい”と本協議会年会への期待を語った。

来賓としてご挨拶を頂いた富山県厚生部長山崎康至氏は“本会で発表される研究成果は国民の安全に役立つばかりでなく、行政施策を行う上でも役立っている。新しいリスクに対応できるように、しっかりと情報共有をしていきたい。”と行政サイドから本会に対する認識を示し、その役割に期待を示した。

その後、24 年度の事業・会計・同監査結果が報告された。さらに、次のような報告があった。①この協議会の会員資格は従来、国や地方自治体の試験研究機関に限定されていたが、大阪の衛研が独立法人化するのに対応し、独立行政法人にもその資格を与えることにした。②総会の発表内容に関するマスコミの取材希望への対応については、取材対象者との協議を行い、年会事務局が調整を行い、取材許可を行う。③総会プログラム等の情報提供の希望が寄せられた日本医薬情報センターには、提供目的が全化協総会の趣旨と合致す

ることを確認し、妥当ならば次回の年会から提供する方向。ただし総会の発表内容を二次情報として利用する場合は、発表者にその旨確認するよう確約してもらう。これらの方向は非公開としてきた総会の従来の方針を変更する内容で、時代と共に全化協はその姿を変えようとしている

来年の第 51 回年会を開催する予定の大分県衛生環境研究センター山村壽史所長は招請挨拶の中で、次回 51 年会は来年 11 月 20-21 日に大分県別府市で開催予定と述べた。最後に本会副会長の群馬県衛生環境研究所小澤邦壽所長が閉会挨拶を行い、総会は終了した。

続いて“ジェネリック医薬品の使用促進に向けた「ジェネリック医薬品品質情報検討会」の役割”についてシンポジウムが行われ、その取り組みが紹介された。

その後、昨年から始められた、各演題の発表者による 1 分間プレゼンが食品部門と環境・家庭用品部門に分かれ、それぞれ 1 時間半に渡り行われた。

特別講演は立山カルデラ砂防博物館長今井清隆氏による“「知られざるもう一つの立山」立山の自然・水との闘い”であった。立山カルデラの崩落により発生した大量の土砂は常願寺川の流れを堰き止め、富山市などに洪水を起こさせてきた。この治水のため、100 年間に渡る防砂工事の闘いが繰り広げられたという。

2 日目は各部門別に示説展示と部門別研究会が行われた。

最後に、本記事作成にあたり、富山県衛生研究所化学部長出町幸男氏ほか関係者の皆様の協力に感謝する。



立山カルデラ

立山カルデラ砂防博物館 提供

東西約 6.5km、南北約 4.5km、標高差が 500~1700m の大きなくぼ地。年間降水量 3000mm を越える多降水地帯にある。降った雨や雪が崩落した岩石を下流に押し流すことを防止するために、100 年間カルデラ内で砂防工事が行われている。2012 年この博物館は立山連峰の劔岳の雪渓(厚さ>30m 長さ 900-1200m)が我が国に残存する最大級の氷河であると学術的に証明したという。